# 『去年の枝折』の再検討

金　京姫

上田秋成（享保十九年～文化六年）は安永八年（一七七九）、湯治のため、妻同伴で城崎温泉への旅に赴き、帰宅後、和歌紀行『秋山記』（同八年成、『藤簍冊子』三）を書いた。さらに翌九年に、前年の旅に基づいて書いたのが俳諧紀行『去年の枝折』である。『去年の枝折』は安永八年九月十二日から十月二十三日までの約四十日間日程の旅の記であり、俳諧作品として秋成二十三句、義竹二句、正名二句、秋成付句三句が入っている。従来の『去年の枝折』についての研究は、俳諧紀行としての『去年の枝折』と和歌紀行としての『秋山記』との比較検討を中心に行われているか[1]、あるいは、秋成の芭蕉観の典型的な資料として取り上げられているか[2]、そのいずれかであると思われる。

本稿では、そのような先行研究を踏まえつつも、新しい視点から『去年の枝折』の再検討を試みる。まず構造について、〈時間の設定〉という観点から整理し直す。その際、秋成が書いた他の紀行文との関係についても考えてみる。また、内容について、笑いという要素に注目する。特に従来は、秋成の芭蕉批判として取り立てられ、論じられてきた部分を笑いの文章として読み直すことができるのではないかということを提示してみたい。

## 一

『去年の枝折』の執筆動機について、秋成は、冒頭部で「むかし鬼貫といふ人有けり。何わざして世を過せし人にやありけん。其人の書捨し物を見れば、老たる親によくつかへたる人と社見えたれ。[3]」と述べる。ここに見える「其人の書捨し物」とは、上島鬼貫（万治四年～元文三年）の『禁足之旅記』のことであり、それは鬼貫が貞享三年（一六八六）に行った大阪から江戸への実際の旅をもとに、四年後に書いた「空想旅行記」である。[4]『禁足之旅記』は、鬼貫生前元禄三年（一六九〇）十月『犬居士』と享保十三年（一七二八）成立の『仏兄七久留万』に含まれて発表しており、没後は太祇によって明和六年（一七六九）一月『鬼貫句選』に収められ刊行されている。太祇は蕪村の盟友であった俳人であるから、蕪村と交流のあった秋成が『鬼貫句選』を目にした可能性は非常に高いと考えられ、城崎行を行う約十年前からの間に読んでいたものと推測される。

ともかく、秋成は『禁足之旅記』を読んで、「鬱寥たる秋の

中〳〵吾妻のかたにたびしたけれど、用なきに身を遠く遊ぶ事、暫老親のためにおもければ、こしかた見つくしたる所〳〵居ながら再廻のまなこをおよぼし、日〳〵こゝろばかりを脱けてゆかば、我願ひもたり、不孝にもあらずとおもひ立ぬ。[5]」という鬼貫のなみなみならぬ孝心に感じ入り、それに倣って自身も難波に居ながらにして前年の城崎温泉への旅を思い起こし、空想旅行記を書くことにしたのである。

さて、鬼貫の『禁足之旅記』からの影響を受けて『去年の枝折』が執筆されたことについては、すでに多くの指摘[6]があるが、両作品の構造を比較した東聖子氏は『禁足之旅記』が現実の難波の家と旅中との二重構造をもつのに対し、『去年の枝折』は「難波の家と旅中の二重構造で書き、現実の俳友が訪れるという構造は同じである。その上に青年時の旅を折々に思い出すという三重構造になっている。[7]」と分析された。肯定される見解と思われる。そこで、東氏の指摘を踏まえながら、『去年の枝折』の構造を詳しく見ることで、『禁足之旅記』からの影響を具体的に提示し、さらに、『去年の枝折』が秋成の後に執筆した紀行文に与えた影響についても検討することとしたい。

それでは、具体的に『禁足之旅記』と『去年の枝折』との構造につき、作品中の〈時間の設定〉を中心にして見てみよう。

次に、二つの作品の中で、時点が変わる部分を抜き書きして提示する。なお、〈時間の設定〉につき説明しておくと、作者が現実に執筆を行っている時点を〈執筆時〉、回想が始まって以前の旅の時点を基準にして記述される部分を〈旅行時〉、旅行時においてそれ以前に行った旅を思い起こす時点を〈回想時〉と分けるものである。

〈(A)(B)は『禁足之旅記』から、(イ)(ロ)は『去年の枝折』からそれぞれ引用する。傍線は筆者による。以下同じ。〉

(A) こしかた見つくしたる所く居ながら（中略）こゝろばかりを脱けてゆかば、我願ひもたり、不孝にもあらずとおもひ立ぬ。　〈執筆時〉

(イ) ねられぬまゝに、さま〳〵越方を思ひ出て、去年はいかにぞやなど獨言して、例のあだ言只手習ひに、　〈執筆時〉

(B) ほのぐらきころ難波の地をはなれて行。草葉の露ハ左右おなじくをけど、船ひく男らの岸づたひにかた〳〵ハ虫のねたへて、是も物のあハれなるべし

（中略）

幽霊の出ところハありすゝき原　〈旅行時〉

(ロ) 露霜こそ寒けれ、朝かげのどかにて、道もすゝみがち也。

武庫川にて、

鞍かりて蹴上つめたし朝ごころ　〈旅行時〉

右から窺われるように、両作ともにそれぞれ〈執筆時〉から始まっており、〈旅行時〉へと時点が変わっている。また、『禁足之旅記』の場合、鬼貫が(B)のように行く先々で発句を詠んだり、独吟を巻いたりしている事に対して、秋成も(ロ)から見るように〈旅行時〉の中で行く先々で発句を詠んでいる。

さらに注目すべき構造上の類似性として、〈執筆時〉における俳友の来訪と、その俳友を伴っての空想旅行というものが挙げられる。次に挙げてみる。

〈(C)(D)(E)は『禁足之旅記』から、(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)は『去年の枝折』からそれぞれ引用する。人名は俳号をさす。〉

(C) 瓠界来りぬ。いざとて行。彼もわれも骸ハ津のくににおきてこゝろは今、関の宿のほとりに遊ふ。野ハ草の茫〳〵としてかれかゝりたる中をみれば、歌仙瓠界発句あり誹諧略之　〈執筆時〉

(ハ) かく思ひつゞくるはまたよひの間の圍爐のもと也けり。伊丹の義竹來たり、句ありとて見す。(中略)さて此たび路の事かたり出て、いざとそゝのかすれど、まだ見ぬ方をいかでとて立去ぬ。　〈執筆時〉

(D) 四日市といふ所にとゝまりて、今日石薬師にていひたる句書つく。　〈旅行時〉

(ニ) 獨のみをれば、心はただにきの崎にうかれ行。　〈旅行時〉

(E) わがこゝろの留主見まひすとて燈外見ゆ。幸にこの人とらへてゆく〳〵両吟して赤坂に宿とる。亥のさがりまで語りて、また例の独寝す。歌仙燈外発句有誹諧略之　〈執筆時〉

(ホ) 正名句を懐にして來たる。(中略)扨旅路の事かたり出んも、心難波に有ていそがしき晝間なれば、いとまをしさに帰しぬ。かしこの案内知たる人也。〈執筆時〉

(ヘ) 此道々は、昔も見し所也。春は蠶かひする家共多きも、　〈回想時〉

具体的に見ていくと、『禁足之旅記』の場合、(C)に見るように突然現実の俳人である瓠界が訪ねてきている。櫻井武次郎氏によれば、瓠界という人物は大阪の俳人として、鬼貫と親交があったという。[8] その瓠界を誘って鬼貫は二人で「骸ハ津のくににおきてこゝろは今関の宿のほとりに」遊ぶという、空想旅行、即ち「心」の旅を続けており、また、枯れかかっている野の草を見ては、瓠界の発句で歌仙を巻いている。それが次の(D)の場面で瓠界は去り、再び時点は〈旅行時〉に変わり、四日市などを通っている。だが、(E)では、また〈執筆時〉に戻り、再び現実の俳友の訪問がある。「わがこゝろの留主見まひすとて燈外見ゆ」として、即ち、鬼貫が「心」の旅をしているのでその留守見舞いと称して燈外がやってきたというのである。燈外という人物は大阪の俳人として、当時、鬼貫、来山、西鶴らとの交流があったと知られている。[9] 鬼貫はこの燈外をも「心」の旅に誘って道中二人で連句をしながら赤坂まで空想旅行を続け、宿を取って「亥のさがり」(午後十時過ぎ)まで話をしている。またここでも、燈外の発句で歌仙を巻いている。

一方、『去年の枝折』では、(ハ)の場面で、突然現実世界の俳友が訪ねてきている。詳しく述べると、時間の設定が〈執筆時〉に戻り、現実の難波の家の炉端に座っていて絶えず思いめぐらしている秋成のところへ伊丹の義竹[10]が自句を見せにやって

来たというのである。そして、（ホ）の場面にも、現実の俳友である正名が訪ねてくる。正名は大阪の俳人として、秋成の俳諧の切字論書『也哉鈔』の序（安永三年・一七七四）を書いた蕪村と親密な関係を持っていたらしく、また蕪村の正名に宛てた書簡を通して正名と秋成との友好関係が推し量れる人物である。ちなみに、その正名はここで発句を二句見せているが、その最初の句「かよひ路はかれ〴〵になる千鳥なく」は、「几董句稿[11]」（安永八年四月より翌年十二月までの句稿）安永九年十月廿二日に正名の句として、無腸の句「月や霰其夜も更て河千鳥」と一緒に載っている。これにより、『去年の枝折』が執筆された安永九年の時点で、正名が秋成を訪ねてきたことは確実であると言えるだろう。

このように、〈執筆時〉と〈旅行時〉が繰り返されることと、突然現実世界の俳友が訪ねてくることなどにより、明らかに『去年の枝折』は『禁足之旅記』に倣っていることが確認できる。

しかし、『去年の枝折』と『禁足之旅記』とでの相違点もある。一つは、『去年の枝折』では『禁足之旅記』に見るように「心」の旅の中で歌仙を巻いたりはしていないことである。たとえば（ハ）のところで、秋成は、やって来た義竹を城崎から天の橋立までの「心」の旅へ誘ってみるが、「まだ見ぬ方をいかで」と断られてしまい、また（ホ）では、大阪の正名は多忙な人なので、のんきな「心」の旅へ誘うこともできず、城崎をよく知っている人なのにそのまま帰してしまった、としている。もう一つは、時間の設定において『禁足之旅記』には見られない場面が記されていることである。たとえば、（ヘ）のように、前年の旅を思い起こしている中、さらに二十年前の旅を回想している。秋成は『去年の枝折』の所々で二十年前にも城崎温泉に滞在したことを記している[12]。すなわち、〈旅行時〉で突然二十年前の旅の時を回想しているのであり、これは、『禁足之旅記』には見られない『去年の枝折』の独自な場面設定と言えるだろう。

以上を整理すれば、まず、『禁足之旅記』と『去年の枝折』との類似点として、作品中の時間の設定において〈執筆時〉と〈旅行時〉とが反復されること、また〈執筆時〉に現実世界の俳友が訪ねてくることが挙げられる。

一方、相違点としては、『去年の枝折』の場合、〈執筆時〉に現実世界の俳友が訪ねてくることを記すものの、共に空想旅行に旅立ち、そこで俳諧作品を作ったりはしていない、すなわち、『去年の枝折』はあくまでも秋成一人の空想紀行となっていること、また、『禁足之旅記』には見られない〈回想時〉の時間の設定が見られることが挙げられる。

## 二

次に、秋成自身の後の紀行文への『去年の枝折』の影響につき検討してみたい。まず、秋成の紀行文について簡単に説明しておくと、現在知られている秋成の紀行文としては、『秋山記』（安永八年）、『去年の枝折』（安永九年）、『山裏[13]』（天明二年）、『いははし[14]』（天明八年）、『御獄さうじ』（寛政十一年）の五作品がほぼ認められる[15]。

その五作品を対象として、前節で行った〈時間の設定〉によって各作品の構造を比較した結果、次のことが言える。それは、秋成の紀行文の中で、『秋山記』と『山裏』と『いははし』は、時間の流れが〈旅行時〉で一貫していることである。これに対して、『去年の枝折』と『御獄さうじ』とは、その作品中の構造のあり方が類似している点が注目される。この点につき、詳しく見ておこう。

『御獄さうじ』は『去年の枝折』より約二十年後の寛政十一年（秋成六十六歳）に執筆された紀行文である。その内容は、「翁三十あまりの古しへ、此高根にのぼらまくのすゞろごゝろして、年々まうづる行ひ人のしりに立て門出す。[16]」とあるように、秋成が三十年前（明和六年か）に吉野の金峯山、大峰山に登った経験をもとにした回想旅行記である。

それでは、次に、『御獄さうじ』の中で〈旅行時〉と〈執筆時〉とが切り替わる部分を左に掲げよう。[17]

（一）山口なる春日の里にやどりぬ、蚊のいと多きに、帳はやれまよひて、いを寐られず、かの檜わり子にむらがりしわろきものにまさりて、いとつらし、こもす行のからきにやかぞふべき、①いとうれしきこと、からきことはわすれぬものから、三十とせまりの昔を、おろ〳〵にもおぼし出られて、この筆のあゆみはすなりけり、

（二）つとめて竹の内の山道こゆる。雨いさゝか降そゝぎて、簑笠の下に汗ながれ、②いとくるしげなり、行手に柿本の里の柿の本寺と云に、人丸の御墓、石ぶみも立りと云、此[4]神の御跡とめて、歌―聖―伝といふ文かいあらはせしに、こゝもたしかならぬものなれば、いきても見ず。

（三）今木の里を過、こゝ[5]の古物がたりは、花の頃吉野の山ぶみせし、岩橋の記に書出たれば、おなじことおもひ出べくもあらず、

（四）松あまたともしつれて、「南無がうざ」谷峰にとよめかしつゝ登る、此ゆくも、きのふも、「物となへよ」と教ふるは、文字の数こそ歌のやうなれ、こゝろ言がらもえ心うまじきを、陀羅尼などのやうにてぞ、其[3]時すら、今一うたもおぼし出んやは、

（五）[6]むかしも山口の花見に分こし時、如意輪寺にたゝせます、後だい醐の御陵墓に詣たいまつりしに、木立いとかんさび、物心ぼそく、すゞろに悲しくもおぼえ侍りしかば、

[7]み山木の日影もゝらぬ下露にふりそふものは
涙也けり

たとえば、（一）は、宿での描写が全く〈旅行時〉になっているが、不意に①から〈執筆時〉に変わり、三十年前に行った旅を回想する時点となっている。（二）の②と（四）の③でも同様のことが見られており、特に（二）は、〈旅行時〉の時点として、山道を越えるのに雨がかなり降り、簑笠の下を汗が流れている、という場面であるが、その際、②では、突然〈執筆時〉に戻って、「いとくるしげなり」と、回想の中の自分の姿

を見ているようになっている。ところがこのあと、④では「此神の御跡とめて、歌―聖―伝といふ文かいあらはせしに、こゝもたしかならぬものなれば、いきても見ず」とある。『歌聖伝』は安永七年（一七七八）秋成四十五歳頃成立したものであって、実際の三十年前の旅よりかなり後の事になる。つまり、時点は再び〈執筆時〉に戻っているのである。また、（三）の⑤と（五）の⑥では〈執筆時〉に『いははし』のことを思い出しており[18]、なお、⑦の歌は『いははし』にも同様に載っている。

すなわち、『御獄さうじ』の中では、作者の意識は〈旅行時〉からたびたび〈執筆時〉に戻っており、その回想時が三十年前の旅であったり、五十五歳の『いははし』執筆時であったりしているのである。

これについて、風間誠史氏は「『御獄さうじ』の旅の記述は、実際の旅の記述であると同時に、執筆時から回想され、その時点の知識・経験にもとづくものでもある。そして、そうした時空のいわば混沌は、「旅」が進むにつれてさらに深まってゆく。[19]」と述べられ、『御獄さうじ』の中に「時空の混沌」が起こっていると指摘されている。しかし、こうした「時空の混沌」については、先に述べた『御獄さうじ』の構造における〈旅行時〉と〈執筆時〉との反復や、〈執筆時〉における回想という点で、『去年の枝折』との類似性を見せる部分としても捉えられるのではないだろうか。

さらに、ここでもう一つ『御獄さうじ』と『去年の枝折』との大きな関連を思わせる箇所を取り上げてみたい。それは、『御獄さうじ』に見える心の分裂の表現である。まず、『御獄さうじ』からその本文を挙げる。

猶分入ば、釈迦が嵩、三かさねの滝にもいたるべしと聞。人々おぼし入ねば、もとの小―篠かき分つゝくる。其三―層の滝は、西上人のいきてよめる哥有しかと思ゆ。いざ見まほしきを、一人はいかでと、今ひとつの心のゆるさねばえゆかず。其時こそあれ、今はうつゝなく迷ひ行心の、すゞろに到て、仰ぎ見れば、

山こそはかさぬとを見れ滝つ浪くもを披きて
雲に落るは

この部分は、行程四日目の日を迎え、秋成が同宿の三、四人と連れだって奥の経が岩屋へ向かう場面である。そこで三かさねの滝のことを聞くようになるのだが、その後、三かさねの滝へ行きたいという「心」とそれを許さない「今一つの心」という表現がされている。これと類似の箇所を『禁足之旅記』『去年の枝折』それぞれから引いて左に挙げる。

廿九日阿辺川を行とき
東路の夜露こふたる紙子哉
道〳〵わがこゝろふたつにわかれて、半心はこの句冬也。惣じて露、月などの類、季のかぎりあるものにむすびては、いづれもその季にひかるゝならひ、しかれば夜露こふ紙子全秋ならずといふ。また半心の曰かなしひ哉、汝色を見ていまだそのいろに奪はるゝ事。尤物につれては四季の間を

わたる露、月なれば、句躰うち聞えたる所秋なし。
（『禁足之旅記』）

獨のみをれば、心はただにきの崎にうかれ行。
月や霰其夜の更て河千鳥

たぞや是に次は、
頭巾とらるゝ橋のにし風

發句はかしこの氣多川に夜の更らんを思ふ也。わきは難波のふる郷さらぬ今ひとつの心が云也。其心も又誘はれ行ては、
眠るか山の陰くらき岸

發句のぬし難じて云。（中略）骨肉離れぬひとつ心の、いとも睦まじかりけり。
（『去年の枝折』）

右の引用から明らかなように、『御獄さうじ』の「今ひとつの心」「うつゝなく迷ひ行心」という心の分裂の表現が『去年の枝折』の方にも「心」「うかれ行」「今ひとつの心」というふうに使われており、さらに、『禁足之旅記』においても「わがこゝろふたつにわかれて」「半心」というふうに見られる。

この『御獄さうじ』における「心」「今ひとつの心」について、米谷匡代氏は、「（前略）行きたくても行けない場所へ通い得る方法として、そして、西行の歌境を尋ねるのに最も相応しい修辞として、『山家集』に於ける、「御獄」「吉野山」「空」へと、自在に通う「心」の表現を用いたのではないか」[20]と述べられた。すなわち、『去年の枝折』との関連から秋成の西行に向かう心に着目して解釈されたものだが、米谷氏が用例として挙げられた『山家集』の「うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかはせん」（九二六）・「嵐ふくみねの木葉に友なひていづちうかるゝ心なるらん」（一〇九八）・「雲につきてうかれのみ行心をば山にかけてもとめんとぞ思ふ」（一五二五）[21]といった歌には「身」から離れた「心」が詠まれてはいるが、二つに分かれた「心」が詠まれているわけではない、ということに注意したい。むろん、秋成の文学の中に西行のことが散見できることなどにより、秋成自身西行に強い関心があったというのは事実であるし、そのような解釈も可能であろう。が、むしろ、秋成は、『禁足之旅記』から影響を受けて「二つに分かれた心」を表現した可能性が高いのではないだろうか。こうして『去年の枝折』が『禁足之旅記』に倣って執筆されたことが、その後の秋成の紀行文にも大きな影響を与える結果となったことを確認することができた。

## 三

次に、『去年の枝折』の内容について、笑いの観点から捉え直すことを試みたい。

『去年の枝折』の内容の中で最も有名な箇所は、芭蕉批判と呼ばれる部分で、これまでも秋成の芭蕉批判を論じる際、常にその典型的な資料、または言説として取り上げられてきている。[22]その内容は、芭蕉崇拝者の言説に当たる前半部と、それに対する秋成の反論に当たる後半部とに分けられる。[23]まず、その

前半部から見てみる。

我より先にやどる人有。修行者と見しかば、へだてのさうじ明やりて、物がたりす。いづこへの修行ぞと問へば、身は雲水にまかせたれど、佛菩さつに後の世の事のみ打頼めるにあらず、風月にふかく心をそみて、我翁の跡おちこち尋ねあるくなるはと云。いとよし有げ也。翁とは何人のうへにて、かくまでしたはせ給ふらんと云。法師いと興なげにて、旅人も頭まろくおはすれば、風雅の道も心得たまひて、かく野山をば分させ給ふにとおもひしに、あからさまに我翁をしらぬよしに聞え給ふは、青き嚢をうながせて、日々に奔走する風塵の士にてやおはす。我翁と云は、元禄のいにしへ人にて、故實を拾穂の門に學び、道を佛頂の言下に参禪し、杜律山家の骨肉に入て、柿園の枝葉の茂きをかり拂ひ、檀林の根ざし廣ごれるを剪つゝ、邪路をふさぎて、正風の一體を興立したまふ。（中略）況や君臣父子妻妾の情を、たゞ一巻のうちに連綿と盡さざる事なし。京極黄門再び世に出たまふとも、我翁にはうなづかせ給ふべし。醫師もいとまあらば時々學ばせ給へ。自愛の薬、鍼浴湯水剤の及ぶべからぬをと、口疾くもかしこく説きこえたり。思ひかけず珍らかに承侍りて、いとまあらば學び侍らんと言すくなにあへしらふに、猶すゝろぎて（ママ）、學ばんとおぼさば、便につけて難波の御許に立よるべくいふ。いとかたじけなきよしにて、あらぬ名どころ書付さす。

この前半部は、従来の研究においては、あまり注目されていない部分であるが、全体的な構図からすると、芭蕉崇拝者の法師と秋成との二人の話が対応しており、しかも、その会話の受け答えが齟齬をきたすようになっている。そこからは強い滑稽性や皮肉な表現が見られる。たとえば、まず、二箇という里の宿で出会った旅の法師（修行者）は、自分について「身は雲水にまかせたれど、佛菩さつに後の世の事のみ打頼めるにあらず、風月にふかく心をそみて、我翁の跡おちこち尋ねあるく」と紹介する。また、「我翁」について問うた秋成に向かって軽蔑を示しながら「我翁」である芭蕉に関する様々な賞賛を述べ立てている。この法師の言葉は、先に挙げた引用からして量的にも前半部の大半を占めており、尽きることなく一息に続いている。

これに対して、秋成の取った態度に注目してみると、「思ひかけず珍らかに承侍りて」「いとまあらば學び侍らんと言すくなにあへしらふ」と記したのであるが、この秋成自身の本心を隠した記述には強い揶揄が感じ取れ、特に「言すくなにあへしらふ」とあるところの、すなわち、聞きたくない、相手にしたくないから軽く受け流した、という表現から滑稽性が感じ取れる。

また、その辟易して凌いでいるような秋成に対する法師の言葉は「猶すゝろぎて、學ばんとおぼさば、便につけて難波の御許に立よるべく」というもので、「なお心がはやって、学ぼうとのお考えでしたら、難波の御許に立ちより、教えてあげましょう」とまで言っている。

一方、これに対する秋成の態度は「いとかたじけなきよしにて」であり、すなわち、大変有り難いお申し出です、というも

のだが、ここには、閉口した秋成の姿が見て取れる。さらに、「あらぬ名どころ書付けさす」とあり、存在しない架空の住所を書き付けさせた、というのであるから、ここには強い滑稽性が感じられよう。さらに、これに続けて書かれた後半部は、従来「芭蕉批判の文章」としてのみ取り上げられてきたが[23]、この文章からも、同様の皮肉、滑稽性を読み取ることができるのではないかと考える。そこをまず引用してみる。

寔やかの翁といふ者、湖上の茅擔（ママ）、深川の蕉窓、所さだめず住なして、西行宗祇の昔をとなへ、檜の木笠竹の杖に世をうかれあるきし人也とや。いともこゝろ得ね。彼古しへの人々は、保元壽永のみだれ打つゞきて、寶祚も今やいづ方に奪ひもて行らんと思へば、そこと定めて住つかぬもことわり感ぜられるゝ也。今ひとりも嘉吉應仁に世に生れあひて、月日も地におち、山川も劫灰とや盡ずなんとおもひまどはんには、何このやどりなるべき。さらに時雨のと観念すべき時世なりけり。八洲の外行浪も風吹たゝず、四つの民草おのれ〳〵が業をおさめて何くか定めて住つくべきを、僧俗いづれともなき人の、かく事觸て狂ひあるゝなん（ママ）、誠に堯年鼓腹のあまりといへ共、ゆめ〳〵學ぶまじき人の有様也とぞおもふ。

秋成の芭蕉批判はよく知られているが、だからといって、芭蕉の俳諧作品を全否定してしまうといった態度は取っていない。たとえば、右の引用からすると、秋成の批判は、芭蕉の旅への姿勢、あるいは、芭蕉像を求めて行脚する蕉門流崇拝者達の態度に向けられている。すなわち、西行や宗祇の生きた時代は戦乱の世であったが故、どことも定めて住みつかぬのは当然であった、しかし、「八洲の外行浪も風吹たゝず、四つの民草おのれ〳〵が業をおさめて何くか定めて住つくべき」太平の世を乱世化している「僧俗いづれともなき人」を批判しているのである。

この部分について高田衛氏は、秋成は乱世を旅に生きざるをえなかった西行や宗祇に対して、元禄という安定した時代社会にあって、漂泊し放浪した芭蕉の時代錯誤をつよく批判していると述べられる。また、「僧俗いづれともなき人」で、「かく事觸て狂ひあるゝなん」とは、芭蕉その人の上に、芭蕉の放浪を狂信し、その真似をいまだに続ける虚構上の「修行者」が重層しており、むしろその狂信者を指していると読むべきだとも指摘されている[25]。

だが、笑いの観点から見直してみると、秋成は、ここでも前半部を受けて、さらに滑稽性や皮肉を狙っているのではないかと思われる。まず、反論が始まるところの「寔やかの翁といふ者、湖上の茅擔、深川の蕉窓、所さだめず住なして、西行宗祇の昔をとなへ、檜の木笠竹の杖に世をうかれあるきし人也とや、いともこゝろ得ね」という部分には、皮肉な口調が感じられるからである。

特に、最終行の「ゆめ〳〵學ぶまじき人の有様也とぞおもふ」と結んだ部分における「學ぶまじき人」という表現に注意してみたい。実は、前半部のにも、これに対応する部分が見られる

のである。それは、前半部の法師の言葉「醫師もいとまあらば時々學ばせ給へ」「學ばんとおぼさば」といった部分である。後半部における「學ぶまじき人の有様也とぞおもふ」との表現は、この前半部の法師の言葉を受け、それに対する秋成の強い反発をこめた表現として受け取ることができるのではないだろうか。さらに、その反論と批判の本心を法師の前では言うことができず、「言すくなにあへしらふ」しかなかった前半部に対応して、「ゆめ〳〵學ぶまじき人の有様也とぞおもふ」と言葉に表さずに心の中で「おもふ」と記したことに皮肉な笑いの要素が見えるのではないだろうか。

もちろん、この部分全体に芭蕉に対する批判が見られるということは否定しようもない。しかしながら、同時に秋成が皮肉な笑いを狙うとの意識で場面を構想しているということも言えるのではないだろうか。

## 四

以上の検討から判明した結果をまとめてみる。まず、『去年の枝折』の構造については、〈時間の設定〉に着目して比較検討を行った結果、『禁足之旅記』から大きな影響を受けていることが確認できたが、さらに、後の紀行文である『御獄さうじ』にも『去年の枝折』からの影響が見られる、ということも分かった。また、内容については、特に従来は、芭蕉批判の文章としてのみ解釈された部分を取り上げ、笑いの要素に注目して再検討を試みた。その結果、そこには芭蕉批判のみではなく、笑いを誘うような場面やエスプリの入っている表現など、笑いの要素が多様に機能しているのが見られた。

これにより、芭蕉批判の部分を滑稽性のある文章としても読み直すことができるのではないか、という新しい読みの可能性を発見できた。

## 【注】

(1) 勝倉壽一氏「秋成の紀行文―「去年の枝折」を中心に」『福島大学教育学部論集』四七号、一九九〇年三月、加藤裕一氏「秋成、城崎への足跡―『秋山記』と『去年の枝折』―」『歌子』一九九三年三月、加藤氏「上田秋成の紀行文（その一）―『秋山記』・『去年の枝折』解読―」『実践女子短大評論』一九九四年一月。など。

(2) 高田衛氏「俳人無腸論」『上田秋成研究序説』寧楽書房、一九六八年、高田氏「秋成の芭蕉観」『中村俊定先生古希記念・近世文学論叢』桜楓社、一九七〇年四月、森山重雄氏「『去年の枝折』とその芭蕉批判」『秋成言葉の辺境と異界』三一書房、一九八九年。など。

(3) 『去年の枝折』本文の引用は国書刊行会版『上田秋成全集』（第一巻、一九八七年）による。以下同じ。

(4) 復本一郎氏「『鬼貫旅日記』評釈1～7」『俳句』角川書店、一九八二年十二月～一九八三年五月。以上の論文を参考した。

(5) 『禁足之旅記』本文の引用は岡田利兵衛編『鬼貫句選』（伊丹資料叢書1、一九七五年）による。なお、引用文中の句読点は私に改めたところがある。以下同じ。

(6) 注（2）高田氏前掲論文「俳人無腸論」、四五〇頁。大場俊助氏『秋成のテンカン症とデーモン』芦書房、一九六九年、二四頁、一七四頁。注（2）森山氏前掲論文、九六～九七頁。注（1）勝倉氏前掲論文、二頁、四頁。注（1）加藤氏前掲論文、一九～二〇頁。など。

(7) 東聖子氏「上田秋成『去年の枝折』考―俳諧的架空紀行の系譜と三

重構造の心―」『国文目白』第四〇号、二〇〇一年二月、一五四頁。

(8) 櫻井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』〈前田国文選書2〉前田書店、一九七九年、六一頁。

(9) 『俳文学大事典』角川書店、一九九五年、六〇二頁。

(10) 伊丹の義竹の句として、「うつそりと春さかぬ木のかへり花」「何かふる夜半ともしらぬ寒さかな」との二句が乗っているが、この俳人についてはいかなる人物か現在のところわかっていない。

(11) 綿屋文庫編俳書叢刊第三期『連句会草稿』天理図書館、一九五四年七月、四〇頁。

(12) 『去年の枝折』の中で二十年前に城崎湯に滞在したことを記しているところは、(へ)の他に、「和田山という處よりは、昔つねに見し里々也、廿とせあまりへだたれど山も河も我を見しれるやうにて」「今津といふ所に仁兵衛と云庖人あり、昔のしる人なれば、来て見るに、こゝも其人はなくて、其子と云男出むかへてもてなす」などが見える。

(13) 『山裏』は天明二年(秋成四十九歳)に、三人の同行者と一緒に生駒を越え、奈良に遊んだことに基づいて書かれた四日間行程の和歌紀行である。

(14) 『いははし』は天明八年(秋成五十五歳)に、西河忠直と同行し、大和吉野へ旅行した和歌紀行である。

(15) 萱沼紀子氏「再生への旅―中年期の秋成―」『作新学院女子短期大学紀要』、一九八四年十二月、一～一七頁。注(1)勝倉氏前掲論文、一頁。注(1)加藤氏前掲論文、一頁。米谷匡代氏「上田秋成の旅に託された西行への心―『去年の枝折』と「御獄さうじ」を題材に―」『弘前大学国語国文学』、二〇〇〇年三月、二一頁。など。また、参考までに、既刊の『上田秋成全集』(第十一巻、歌文篇二、中央公論社、一九九四年)においては、「紀行類」として、『山裏』『迦具都遅能阿良毘』『いははし』『箕尾行』『山霧記』『古寺の秋』『北野加茂に詣づる記』『初瀬詣』の八作品が所収されている。これに対し、所収されている作品の他にも紀行文が見られる事や、また、『山裏』『いははし』の以外の作品については紀行文として認めがたい点のある事なども指摘できる。

(16) 『御獄さうじ』本文の引用は中央公論社版『上田秋成全集』(第十巻、一九九一年)による。以下同じ。

(17) 引用文中の番号及び傍線は筆者による。

(18) 『いははし』に、(三)の⑤につき、「車坂といふは、古ことの葉なる今木山にはあらぬ歟。こえてのこなたは、今城の里也。こゝに天狗の森と云は、昔、黒彦の皇子、眉輪の君、つむらの大臣等をあはせて葬りしいま木の槻の本の墓也と、輿地志にしるされたり。」とあり、(五)の⑥につき、「谷をわたりて、如意輪のみさゝきにぬかつきまつる。こゝも御墻の内つ国とは申せと、今は宮人のいきかひなき荒山中にはふらし奉る事のかなしさよ。」とある。

(19) 風間誠史氏「書く行為の時空―「御獄さうじ」論」『近世和文の世界』森話社、一九九八年六月、二九三～二九四頁(初出は、『日本文学』一九八四年一月号)。

(20) 注(15)米谷氏前掲論文、三〇頁。

(21) 注(15)米谷氏前掲論文、三三頁。

(22) 注(2)高田氏前掲論文「俳人無腸論」、四五八～四六〇頁。「秋成の芭蕉観」、四九七頁、五〇三～五〇八頁。高田氏「上田秋成の見た芭蕉と蕪村」『国文学 解釈と鑑賞』、二〇〇一年二月、一三九～一四〇頁。中村幸彦「上田秋成雑記」『中村幸彦著述集』第六巻、中央公論社、一九八九年、二三四頁。注(2)森山氏前掲論文、一〇八～一一二頁。注(1)勝倉氏前掲論文、八～一〇頁。注(1)加藤氏前掲論文、一九、二〇頁。

(23) この部分につき勝倉壽一氏は、芭蕉に心酔する修業者の論述と、秋成の反論部分とに分かれるとされた。注(1)勝倉氏前掲論文、八頁。

(24) 注(22)に同じ。

(25) 注(22)高田氏前掲論文「上田秋成の見た芭蕉と蕪村」、一三九～一四〇頁。

## 【付記】

本稿は、平成十四年七月七日に行われた日本文学協会第二十二回研究発表大会における口頭発表に基づくものである。席上、ご教示を賜った稲田篤信先生、風間誠史先生、東聖子先生に深謝申し上げる。

（キム　キョンヒ　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科　学際カリキュラム）